



UTCMES ニュースレター

VOL.13 2018

1. イバード派研究に関する東京国際会議が世界に広げる 学術交流の輪	1	(3) 保井 啓志「イスラエルの性的少数者事情～留学生活を もとに～」	
2. 講演会開催報告記	3	(4) 上野 祥「エジプトにおける政治の現状―現地での経験 から学ぶこと」	
ベルナルド・エベルジェ教授講演会			
3. 着任の挨拶とレバノン生活案内	4	5. センターの活動から	16
4. 現地留学・調査報告	7	中東地域研究センター附属図書室バフワーン文庫 開室状況報告	
(1) 早川 英明「ペイルートで耳を澄ませば」		6. スタッフ・発行者情報	16
(2) 大淵 久志「ミュンヘン大学留学報告」			

1. イバード派研究に関する東京国際会議が世界に広げる 学術交流の輪

森元 誠二

2017年5月、東京大学カブース講座はオマーン寄進宗教省の協力を得て、駒場キャンパスにて「第8回イバード派研究に関する国際会議」を開催した(ニュースレター Vol.11, 2017参照)。同会議は、オマーンで主流を占めるイスラム教イバード派についての啓蒙も兼ねて、学者や研究者が学術的見地から3日間にわたり議論するものであり、世界各地から関係者が集う。開催地は年ごとに異なり、2018年は北京大学で9月に開催されることになっている。

東京会合では、2016年2月にスウェーデンのルンド大学で開催された「女性の地位に関する日・スウェーデン・オマーン三極ワークショップ」(ニュースレター Vol.9 2016参照)で主催の労を取ってくれたマリアンヌ・ラーナツア(Marianne Laanatza) 特任講師も参加し、自国モ

ロッコにおけるイバード派の動向を踏まえたプレゼンテーションを行うなど、この世界における学術交流や意見交換にとっても有意義なフォーラムとなっている。

会議初日の全体会合には、日本を初めて訪問するアブドラ・サーリミー寄進宗教大臣が出席し、この会議が持つ意義を説くとともに、この会議が日本で開催される機会を捉えて、自身初めて日本を具に知る機会



を得て喜ばしいとの気持ちを述べた。サーリミー家はかつてオマーン内陸地で勢力をふるったイマーム国の有力部族の一つであるが、その後、世俗勢力のスルタンが実権を握り、カブース国王の代に至ってオマーンを統一し近代化の道を歩み始めるにつれて平和裡にその体制に取り込まれて、今日では宗教関係を取り仕切る重要な役割を果たすようになってきている。

初日夜の夕食懇談の席で、私はオマーン在勤時から旧知の仲であるアブドラ大臣から、「日本はオマーンにとって特別の結びつきがある国であるが(筆者注:王族に日本人の血を引くブサイナ王女が存在する他、伝統的に良好な関係を基礎にカブース国王下で推進されたオマーンの近代化に日本が積極的に協力してきたことを示唆する)、最近、とみに中国の進出が進む中で日本の存在感が薄れることは残念である。オマーンの友人であるあなたから、例えば、教育の分野で何か象徴的で日本の貢献を示すようなことができないものか、知恵を貸してほしい」と相談を持ちかけら



懇談の席でスピーチするアブドラ寄進宗教大臣

れた。直ちに名案があるわけではないが、大臣からの依頼でもあり、分かりました、考えてみたいと取り敢えずの返事をした。

この返答がだんだん気重にさせる中で、私は取り敢えず、二つの選択肢を頭に描いた。一つは、目下自分の関係するIT企業の協力を得て、オマーンにおけるITインフラを養成するという研修プロジェクトである。内々相談するとこの企業側からはドバイ支所からの支援を得て協力する用意があるとの前向きな感触を得たが、何せ経費がかなりなものになるだろうことは予測がついた。もう一つは、日本人のノーベル賞受賞者にオマーンを訪問の上ノーベル講演を行い、同国の若手知識層を鼓舞してもらうとのアイデアである。何人かの受賞者の顔が浮かぶ中で、丁度私のスウェーデン在勤中の2014年に青色LED発見の功績でノーベル物理学賞を受賞した名古屋大学の天野浩教授はどうだろうと考えるようになった。気さくな人柄の同教授は、夫人とともに海外との親善や学術の交流にも関心が高い。内々打診すると、オマーンという未知の国は興味深いと二つ返事で引き受けてくれた。

この二つの企画をオマーン側に伝えると、早速、天野教授をマスカットに招いてドイツ工科大学 (German University of Technology in Oman: GUtech) でノーベル講演を行って欲しいとの要請が来た。GUtechはドイツのアーヘン工科大学が教育・運営に深く関与する私立大学である。昨年創設10周年を迎えたところであ

るが、創設式にカブース国王自らがキャンパスに足を運んだのは、国立のスルタン・カブース大学とこのGUtechであることが示すように、工学分野ではオマーン国内で名を馳せた存在である。後で知ったことであるが、何とアブドラ大臣は同大学の理事長を務め、大学の運営にはサーリミ一族が深く関与している。

極めて多忙な天野教授とタイミングを見計らって、同教授と私は2017年の年末から年始にかけてオマーンを訪問した。マスカット滞在中、天野教授はGUtechでノーベル講演を行い、創設10周年を記念してキャンパスに建てられた科学史博物館の開館式典に主賓のハイサム殿下 (遺産文化大臣) と共に出席して祝辞を述べたほか、日本人学校生徒との対話、オマーン政界の要人との会談 (マンゼリ国家評議会議長、ハーリッド王宮大臣、アラウィ外務大臣他)、古都ニズワの視察など精力的に日程をこなした。特に、オマーンの家来像を議論する国内委員会を主宰する立場にある王宮大臣のイノベーションに対する関心は高く、天野教授に対して再度の来訪を要請し、委員会メンバーに刺激を与えてほしいと述べていた。

GUtechの理事長を兼ねるアブドラ大臣のノーベル賞受賞者天野教授に対する思い入れにも強いものがあった。到着後の会談で、学内に「天野教室」を設けるので名古屋大学との間で工学分野における学術交流を進めたいとの自身の気持ちを吐露し、我々が帰国の途につくまでに、その



ドイツ工科大学でノーベル講演を行う天野教授



ハーリッド王宮大臣との会談。右隣はアブドラ寄進宗教大臣

趣旨を盛り込んだ名古屋大学総長に宛てた書簡を用意するという具合に情熱のこもった対応であった。

このようなオマーン側の対応を受けて、名古屋大学の側でもいかなる協力が可能かについての方途を探るべく、2018年6月、国際関係を担当する渡辺義人理事・副総長を団長とする調査団を派遣し、GUtech関係者と協議を行った。その結果、先ず手始めにGUtechから幾つかの分野を代表する教員数名が名古屋大学を訪問し、同学の対応する分野の教員とワークショップを開催して教員レベルでの相互理解、ネットワークの形成を進めることとなった。将来的には、教員や学生間の交流も視野に入ってくる。天野教授も自身の訪問が契機となって国際交流の輪が広がり、オマーン若者の人造りに役立つ企画が立ち上がりつつあることを多とし、プロジェクトが本格的に稼働した際には自らも何らかの形で役立ちたいとしている。

東京大学のカブース講座やバフワン文庫に続いて、このような形でオマーンと我が国の高等教育機関の学術・研究活動が広がりつつあるのを私としても嬉しく思っている。GUtechは新たに初等中等教育を包摂した一貫教育の確立を目指しており、この分野ではフィンランドの制度を導入することにしたそうである。アブドラ大臣の顔を思い浮かべながら、この分野でも何か日本の貢献があり得るのではないかと思案するこの頃である。

2. 講演会開催報告記

ベルナルド・エベルジェ教授講演会

報告：江原 聡子

(東京大学大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻修士課程)

去る4月25日、東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム1において、「アレppoのキリスト教徒(16-19世紀): 共同体と個人」(Christians in Aleppo(16th-19th Century): communities and individual)のタイトルで、ベルナルド・エベルジェ(Bernard Heyberger)教授の講演会が行われた。講演者のエベルジェ教授は、フランスにおける国立の特別高等教育機関である社会科学高等研究院(略称EHESS)及びフランスの高等教育・研究機関である高等研究実習院(略称EPHE)の教育理事を務めておられ、中近東に古くから住むキリスト教徒(多くはアラビア語話者)の専門家である。今回の来日は、同志社大学の招聘により実現したものである。講演は英語で行われ、今日の中東情勢にも繋がる内容であったこともあり、出席者は熱心に聞き入り、活発な質疑応答も行われた。

講演は、アレppo関連の遺物や図像を示しながら進められ、内容は次のようなものであった(以下、当日の配布資料を基にご紹介する)。



講演者のベルナルド・エベルジェ先生

オスマン帝国下の都市アレppoにおけるキリスト教徒

17世紀のアレppoは、イスタンブル、カイロに次いでオスマン帝国第3の都市であり、同時に、非常に重要なキリスト教都市でもあった。それは、アレppoとアレppoのキリスト教徒が、さまざまな文化の交差点にいたためである。アレppoはこの時代、イスラーム勢力に取り巻かれる中でキリスト教徒でいることの意味について、いくつかのエビデンスを提供してくれる。

1. アレppoのキリスト教徒

18世紀のアレppoのキリスト教徒には、中東全体の中においても尊敬すべき教会があるが、両者はさまざまな宗派の支配下にあり、それは5世紀の古代末期における政治的、神学的葛藤に遡る。アレppoのキリスト教徒は、ビザンチン人が属していた「ギリシア派」「メルキト派」が最大多数派であり、次いでアルメニア人、西シリア人(ヤコブ派)、マロン派そして東シリア人(ネストリウス派)が続く。17世紀初頭にアルメニア人名士が建てた教会は、2014年に破壊されるまで、我々が訪れることができた。

アレppoのキリスト教徒は15世紀にその存在が証明されている。アレppoの繁栄と権威者たちの少数派への慈善は、キリスト教徒の人口増加を促した。オスマン帝国の統計によれば、1537年にはアレppoの人口全体の5.4パーセントであったキリスト教徒は、17世紀末には20パーセントになっていた。しかし異教徒であるキリスト教徒は多くの差別的ルールに従わねばならなかった。キリスト教徒は宗教的儀式を行うにも厳しい制限があり、法廷ではムスリムと同じ法的権利を有することはできず、人頭税を払い、特別な装いをしなければならなかった。

しかし最近の研究によれば、キリスト教徒はよく法廷に訴えており、彼らはイスラームの正義を自分たちの利益にいかに関与するかのよく承知していたため、ムスリムに対して勝訴することは可能であった。またキリスト教徒同士の契約や諍い、宗派間の問題は、ムスリムの法官の前で採り上げられることができた。

2. キリスト教徒とムスリム間の文化共有

またキリスト教文化はイスラームのそれと完全に異なるわけではない。アレppoのジュダイダにバイト・アル=ワキールという17世紀初頭に建てられた家があり(現在はベルリン博物館に保存されている)、主人はキリスト教徒であるが、イスラーム起源の名を持っていた。家の広間はイスタンブル宮廷文化に類するオスマン=ペルシア・スタイルの絵で飾られ、アブラハムの物語がムスリムの解釈に従って描かれていた。またメルキト派では、17世紀後半から酒と豚肉の飲食、販売は不法とされた。

3. 世界への開放と西洋化の始まり

オスマン帝国の統一に伴い、キリスト教徒の地平も広がり始めた。17世紀になるや、アレppoのキリスト教徒は、アラビア語を話す同教徒の生活において、大きな役割を果たした。彼らは、カイロからイスタンブル、サイダからモースルまで、教育や他の東方のキリスト教徒との交易のために遠く赴いた。親族のいる他の宗教センター、地中海周辺地域やペルシア、インドにおいてさえ、彼らは巨大なネットワークを率いていた。

さらにアレppoと西洋のキリスト教徒の直接の繋がりが改善された。小さなヨーロッパ人共同体がアレppoに置かれ、地方のキリスト教徒とユダヤ人がそこで雇用された。彼らのうちの何人かはイスタンブルからエジプトまで海を渡る船を持っていた。彼らはヨーロッパ人領事の公的通訳を務め、ヨーロッパ国家から保護され、人

頭税やイスラーム法廷の裁判権を免除された。

カトリックの宣教師、イタリアのフランシスコ会修道士、カルメル会修道士、フランスのイエズス会修道士、カプチン会修道士がアレppoに定住した。彼らは子供たちを教育し、教理問答を教えた。内密の告解は、意識をコントロールし、確固たるカトリック教育を与える主要な手段の一つであった。アレppo出身の多くの子供たちがローマに学びに行った。彼らの何人かは故郷に戻り、ラテン語やイタリア語の本をアラビア語に翻訳した。そのためアビラのテラサやイグナチウス・デ・ロヨラの作品のようなカトリック文学のベストセラーが、17世紀末になるとアラビア語で読めるようになった。宣教師たちの最も成功した仕事は、友愛団体の成立である。これらの団体は読書を奨励し、衛生学や規律を教え、異端者や異教徒と自分たちを区別することを説いた。

アレppoのメルキト派の総主教マコーユース・アッ＝ザイームは、ギリシア語からアラビア語へ多くの書物を翻訳した。またアレppoのある修道士は、古典アラブ詩の形式カスィーダによって、イエスの聖なる心を讃える非常に近代的なラテン語の祈禱を書いた。彼はムスリム詩人からインスピレーションを受けていた。このように

東方教会の宗派はすべて、西洋近代カトリシズムと地方教会の伝統の間の統合の形を経験していた。

結論

17世紀からアレppoのキリスト教徒は、「オスマンの平和」の下、大版図の統一から利益を得、エジプトやイスタンブルと接触し出した。しかし帝国の国境を越えると、彼らはまた一方でベルシアやインド、他方でキリスト教ヨーロッパと繋がりを持った。外部との接触はアレppoのキリスト教徒に、自らの文化と歴史を顧み、アイデンティティを構築する機会を提供した。ムスリム支配の文化ばかりでなく、ローマ・カトリックの宣教師やローマで教育されたアレppo人によって導入された新たなキリスト教モデルに向き合いながら。このやり方で、彼らは19世紀のアラブの覚醒に大きく貢献した。アレppo出身のマロン派キリスト教徒ハンナ・ディヤーブは、アレppoに滞在する仏商人のために働いてフランス語を学んだ。彼はパリで、『アラビアン・ナイト』を編集集中だったアントワヌ・ガランに物語を語った。彼は16の物語を語り、その中に最も名高いアリババとアラディンが含まれていた。これらの物語は典型的東方的なものとして考えられている。しかしこれらの物語にはアラビ

ア語の典拠がなく、今日、専門家は、ハンナはむしろ西洋的物語パターンに従ったのだと考えている。

今日、アラブ人キリスト教徒とアラブ人ムスリムは一般に、西洋の文化的支配権への不正とクレームによって影響されている。人々は17、18世紀に同じようには感じてはいなかった。最近のアラブ諸国でのさまざまな出来事を経て、アラブ人を犠牲者としてばかりでなく、彼ら自身の歴史舞台における俳優としても考えながら、西洋文化とアラブ的東洋の間の関係を再考する時が来ている。

なお、講演会後にはエベルジェ教授を囲んだ懇親会があり、様々な話題について深い意見交換がなされた模様である。



講演会の様子

3. 着任の挨拶とレバノン生活案内

近藤 洋平

はじめに

皆さまこんにちは。2018年4月から、UTCMESを拠点に再び活動しています。今回は2012年4月から3年間、皆さまから多大なご協力を賜りました。この先も変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りたく、何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、2015年3月末に東京大学を退職した後、翌月から2018年の3月まで、私は妻とともに中東のレバノン共和国（以下、レバノン）で暮らしていました。私にとって海外での長期生活は、2008年8月から2年ほど、アラビア半島のオマーン・スルタン国で暮らして以来です。以下、

レバノン国内の様子などを、簡単に紹介していきます。

レバノンという国

レバノンは、西は地中海に面し、南はイスラエル、そして東と北はシリアと接している国です。岐阜県ほどの国土に、レバノン国籍保有者のほか、パレスチナ難民やシリア難民など、600万人ほどが暮らして

いるとされています。日本との時差は7時間ですが、3月末から10月末までは夏時間になるため、両国間の時差は1時間縮まり6時間になります。

レバノンの気候は地中海性気候です。すなわち乾季である夏と、雨季の冬があり、季節の変わり目に、過ごしやすい春と秋があります。レバノンは沿岸部、山岳部、高原部からなります。山岳部や高原部は、夏季は幾分過ごしやすい反面、冬季は気温が下がり、雪が積ります。レバノンの首都ベイルートは、夏は平均最低気温が24度ほど、平均最高気温が30度ほどで蒸し暑くなります。一方冬は、平均最低気温は8度から10度くらい、平均最高気温が15度前後です。私たちが首都ベイルートで暮らしていた時には、最低気温が氷点下を下回ることはありませんでした。

日本からレバノンに向かう場合、現在直行便は運行されていません。1回の乗継ぎで済む場合には、アラビア半島のペルシア（アラビア）湾岸地域、もしくはヨーロッパを経由する必要があります。日本からは18時間ほどで到着します。レバノン入国にはビザが必要となりますが、短期間の滞在ビザは、現地の空港での入国審査時に無料で取得できます。また、レバノンは現在イスラエルとの間に国交を有していません。パスポートにイスラエル滞在が記録されていると、レバノンへの入国は認められません。この点注意する必要があります。また隣国シリアへは陸路によって往来ができます。しかし我々が滞在していた当時、シリアは内戦による混乱の度合いを深

めており、日本国外務省は、「シリアへの渡航を止めてください」という退避勧告を発出していました。

ベイルートで暮らす (市内の様子)

地中海性気候に属するベイルートは、夏は毎日快晴で天気予報を見る必要はありませんが、日差しが強烈なので、サングラスが必需品です。一方冬は1日のうちで天候がめまぐるしく変わる日も多いため、そして雨が降ると土砂降りのことも多いので、傘と長靴が手放せません。私たちは東ベイルートにアパートを借りましたが、東ベイルートは起伏の多い地形のために、冬には道路を雨水が勢いよく流れていました。

市内の交通手段は、ミニバスやマイクロバス、セルビスと呼ばれる乗り合いタクシー、そして普通のタクシーが利用できます。都市間を結ぶ最新型の大型バスも、手頃な値段で利用できます。最近では電子端末のアプリケーションを使ったタクシーの配車サービスが普及しています。このサービスは安価であるために、多くの利用客を獲得しているようです。一方徒歩の場合、歩道は狭く、さらに工事などで荒れていることも多いので、注意して歩かなければなりません。市内に自転車店がありますが、起伏の多い土地柄かつ気候条件から、日常的に使う、というよりは、ロードバイクやマウンテンバイクを、スポーツやレジャーとして用いる、という印象を受けました。

なお、エジプトのカイロとベイルートで

は、どちらが車の運転マナーが悪いのか、が話題になるほどです。幸い巻き込まれることはなかったものの、3年間の滞在中、両手両足では足りないほどの交通事故現場を目撃しました。道路交通法の改正による罰則強化などで、警察は危険運転等の取り締まりを強化していますが、ベイルートで横断歩道を含めた路上を移動する場合には、自動車の動きに細心の注意を払うことが望ましいです。

ちなみに滞在中、私たちは危険な目に遭うことはありませんでした。気を張って慎重に行動し、外務省や現地の日本国大使館が発信する情報に従って行動すれば、ベイルートおよびレバノンの治安は良好、という印象を受けると思います。

(物価と食べ物)

一般的に、レバノンは近隣の国々に比べて物価が高いとされています。例えば外食産業はとても発達していますが、いくらかまとまった予算が必要となります。お昼にちょっとした定食を食べると、その値段は東京で定食を食べると変わらないほどです。一方で、国内でとれた旬の野菜や果物は、新鮮で、そして日本と比べるととても安く手に入れることができます。市内には大型スーパーもあり、割高ですが、醤油やみりん、豆腐なども入手することができます。野菜や果物、精肉などの生鮮食品は、量り売り・対面販売で買うこともしばしばです。私は毎週日曜日の午後、住んでいたアパートの近所の駐車場が開かれる青空市場に行き、そこで1週間分の野菜と果物を買うことが日課でした。輪切りにした米なすを焼いてハンバーガーを作ったり、夏野菜を煮込んだり、シエスタの目覚めにメロンで水分補給をしたり、といった食生活でした。

レバノン料理は、日本国内でも提供する店がいくつかありますが、やはり現地で食べるものは格別においしく感じられます。レバノン料理は、中華料理のように、大皿で供された料理を各自が小皿に取り分け



職場に隣接した、イスラム教のモスク（会衆礼拝堂）とキリスト教の教会



階段のある風景

て食べるため、複数人で料理店を訪れるとより楽しめるでしょう。ただし先に述べたように、日替わりの定食もあるので、一人での外食も問題ないですし、具材を平たいパンで包んだファーストフードは、手軽に食べられます。さらに国内では、ビールやワイン等のアルコール飲料が簡単に入手できます。特にワインについては、古くから生産されていましたが、19世紀以降にフランスから新技術が導入されて以来、レバノン産のワインはさらに磨きかけられました。現在、レバノンのワインは国内外で高い評価を受けているようです。

ちなみにレバノン政府は、レバノンポンド (LBP) という通貨を発行していますが、アメリカドル (USD) が国内で広く通用します。1USDは1500LBPで計算され、例えば大衆食堂で22500LBPの支払いをする場合、15000LBPと5USDをあわせて支払う、ということも可能です。ちょっとしたレストラン等では、サービス料としてチップを支払います。このほか、国内ではクレジットカード決済もできます。

(インフラ)

基礎的インフラについて言えば、レバノンでは電気と水道の供給が日本ほど確立していません。そのため、長期滞在でアパートを借りることを検討している場合には、候補物件の様子をしっかりと確認することが重要になります。電気は、ベイルートでは毎日1日3時間の輪番停電(あるいは、計画停電)があります。輪番停電中は大家が個別に契約している発電機を通じて電気を得ることになります。輪番停電への切り替え時には、いったんすべての電源が落ちるため、その時間をまたいだ電化製品の利用は控えた方が無難です。また盛夏など、電力需要が増大すると、供給が間に合わなくなり、停電、輪番停電用の発電機が稼働、という事態が発生します。

一方水について、レバノンでは夏季に雨がほとんど降りません。数ヶ月前に降った

雨や雪の水で、その年の夏を乗り切るため、冬季の降水量が人びとの大きな関心事の一つになります。なるほど夏季であってもミネラルウォーターは比較的豊富に流通しているため、飲み水に困ることはないかもしれませんが、一方、洗濯や食器洗い、またトイレやシャワーなどの生活用水については、十分な節水を心がけた方がよいでしょう。多くのアパートの台所には、水道局が整備した水道管につながれた蛇口と、各建物が個別に設置した貯水タンクにつながれた蛇口があります。私たちが暮らしたアパートでは、水道管につながれた蛇口からは、夏季はよくて2日に一回、ちょろちょろと水が出るのみでした。そのため、貯水タンクの水をうまくやりくりしていました。冬場は2日に一回、水道局の水栓から水が出たので、それを6リットルの空のペットボトル数本に蓄え、利用していました。また、現地の人によれば、数年前までは水道局からの水はそのまま飲めたようですが、現在では控えたほうがよいとのことでした。

もちろん、基礎的インフラの問題については、十分な予算があれば乗り越えられるでしょう。

このほか、2015年7月から9月にかけて、国内のゴミ処理場(埋め立て地)が満杯になりゴミの回収ができない、といういわゆる「ゴミ問題」が発生しました。幸いその後は沈静化しましたが、レバノンではゴミの分別が徹底されておらず、将来にわたってこのような事態が再発することが予想されます。

レバノンの見どころなど

2017年末に日本国外務省の海外安全渡航情報が更新され、レバノンの危険度もいくらか緩和されました。この先多くの人々がレバノンを旅行先に考えるかもしれませんが、観光地としてのレバノンの魅力をこの場で詳細に語ることは難しいですが、例えば内陸部パールベックに残る古代の神殿や、北部トリポリの旧市街の町並

み、そしてビブロスやスール等の沿岸部の遺跡は、歴史好きにはたまらない光景でしょう。また山岳部に残るレバノン杉やスキー場に海水浴などは、大自然やスポーツを満喫したい人々を惹き付けることでしょう。

現在、現地の空港で取得できるビザは、59日を超えない日数での滞在が可能です。長期での滞在を希望する場合には、さらに1ヶ月の滞在延長をすることもできます。レバノンの大学に籍を置く、レバノン人が所有する会社で働くなどの場合には、在東京のレバノン大使館で半年などの長期の各種ビザを取得することができます。

終わりに～レバノンで暮らして

3年間レバノン暮らしでは、日本やオマーンでの暮らし方と異なる点も多く、戸惑うこともしばしばありました。反対に日本では得ることができない、貴重な経験もすることができました。3年間で得た経験を生かして、これから暮らしていければと思っています。



パールベックの神殿

4. 現地留学・調査報告

(1) ベイルートで耳を澄ませば

早川 英明
 東京大学大学院総合文化研究科
 地域文化研究専攻博士課程

ベイルートには様々な音が充ち満ちている。高速で路地を走り抜ける車の音、その車が出す不快なブレーキ音、無意味に鳴らされるクラクション。いきがった若者がスポーツカーのエンジンを空吹かす音、カーステレオからの大音量の音楽。近所のどこかでモーターか何かの鳴る音、アパートの故障した室外機が吐き出す殺人的な重低音。花火で何かを祝う音、実弾射撃で何かを祝う音。ご近所さんが会話する大声、誰かを呼ぶ大声。物売りの声。そして教会の鐘の音や1日5回のアザーン。

こうした日常的な音に加えて、筆者の住むイスラム教徒が多数の地区では、5月の半ばから、太鼓を鳴らしながらなかしらの台詞を叫んで廻るおじさんの声が毎晩深夜1時くらいに近所を響き渡るようになった。5月半ばといえば今年のラマダンが始まった時期である。ラマダン中に断食する場合、日の出前にとる食事をスフールというのだが、ムサッヘルと呼ばれる人が、目覚ましに太鼓を鳴らしながら、「スフールを食べるために起きましょ」とご近所に伝えて廻るという風習があるのだ。とはいえ、日の出前の食事の時間を伝えるべきなのに、筆者の住んでいる地区ではなぜか午前1時にやってきて、真夜中に人々をたたき起こすので、筆者の住むシェアアパートの同居人たちには不評であった。もっとも、レバノン人であっても、イスラム教徒が多数の地区に住んだ経験のない者は、ムサッヘルの存在を知らないことがあるようで、最近引っ越してきた筆者の同居人の一人は「ここに住むまで、おとぎ話の中にしか存在しない人だと思っていた」と言っていた。地域によってはムサッヘル

が伝統的な衣装を着ていると聞いたので、ある晩少し期待してベランダからその姿を拝んでみたが、Tシャツ短パンを着ているのみであった。

ラマダンが終わると、ムサッヘルは来なくなりましたが、今度はワールドカップが始まり、試合後のお祭り騒ぎという、また別の音が聞こえてくるようになった。レバノンチームは今回は出場していなかったが、レバノン人はそれぞれ自分の応援するチームを決めてワールドカップを観戦していた。街では至る所に有力チームの旗が掲げられていたほか、小さな国旗を窓から掲げたり、ボンネット一面に国旗のステッカーを貼ったりして応援する車が多数走り回っていた。実はこれに対しベイルート市長が「レバノン以外の国旗を掲げることは違法である」と発言して熱気に冷や水を浴びせたのだが、市民たちは無視して国旗を掲げ続けた。筆者が観察したところ、ブラジルとドイツが二大人気のチームであり（過去の大会では今回不出場のイタリアを加えた3チームがトップ人気だったらしい）、それにスペイン、フランス、アルゼンチンなどが続く、といった感じで、もちろん日本を応援する人などいない。最良のチームがゴールを決めたり、試合が終わって勝ったりすると、車のクラクションを鳴らしまくったり、花火を打ち上げたり、場合によっては実弾を打ち上げたりしてお祝いする。このため、例えば筆者がブラジ



パブリックビューイングの様子



市内に掲げられた外国の国旗

ル戦を見ずに家でなにか作業をしても、突然街が騒がしくなるので、「ゴールが決まったな」「ブラジルが勝ったのだな」ということが分かるのである。しかし、この盛り上がりの陰で、残念な事件も起きている。ベイルート南郊外で、ドイツチームのファンが、ブラジルチームの勝利を祝う隣人に腹を立てて彼を刺殺してしまったのである。最良のチームの違いは殺人のきっかけに過ぎず、原因は別にあった可能性もあるが、いずれにせよ悲劇的である。

ただ、何かをお祝いする音は、ワールドカップ開催期間中に限らず、頻繁に聞こえてくる。打ち上げ花火でお祝いするのはいいが、実弾射撃は危険なので困ったものである。もちろん流れ弾による死傷者も出ているので、社会問題となっていて、政府や有力政治家が度々自粛を呼びかけている。例えば最近では、6月に中学卒業試験の結果発表があったのだが、重要な試験の結果発表は毎年実弾の祝砲が上がるとして警察から注意喚起があった。筆者の携帯電話にも、「殺すことを受け入れますか/あなたの成績証明書が他人の死亡証明書の原因になる必要はありません」という一斉送信のショートメッセージが警察から届いた（他に、駐レバ

ノン日本大使館からも在留邦人に対しての注意喚起のメールがあった)。この日の夕方は家でおとなしくしていたが、確かに何かを打ち上げる音はたくさん聞こえてきた。しかし、正直なところ、筆者には花火の音と銃を撃つ音の区別はつかない。

こうした様々な騒がしい音を時には楽しみ、時にはそれに悩まされながら、筆者は昨年9月から、松下幸之助国際スカラシップの助成を受け、ベイルートでの留学生生活を続けている。留学生活での一つの目標はアラビア語レバノン方言を身につけることで、筆者は留学当初から語学学校に通っている。ベイルートにはいくつか語学学校があり、主なものとしては筆者の通うALPS(西ベイルート)の他、Saifi Institute(東ベイルート)、Ifpo(フランスの研究機関)付属の語学学校、ベイルート・アメリカン大学付属の語学学校もある。これらの語学学校のほとんどが、正則アラビア語とレバノン方言の両方の授業を行っている。筆者の語学学校に通う生徒の大半はヨーロッパ、南北アメリカ、オセアニアから来ており、アジアやアフリカからの生徒は少数派である。受講の目的としては、筆者のように研究目的の者もいるが、他には仕事などの関係でレバノンに長期滞在しているので、せっかくだからアラビア語を学ぼうとやってくる者も多い。また、ヨーロッパからの生徒には、NGOなどでシリアからの難民の支援に関わっているという者も目立つ。シリアからヨーロッパにやってくる難民と関わる際に、多少のアラビア語が役に立つというわけだ。他にも、ヨーロッパのある国で難民審査官として働く人が、同じような理由で来たことがあった。本来であればシリア方言を学びたいが、現在シリアに行くことは難しいため、それに近いレバノン方言を学びに来るのである。また、世界各国から、レバノンにルーツを持つ人(例えばレバノン移民2世、3世)が、アラビア語を学びにくる例も見られる。

語学学校の授業の質は高く、筆者も大変満足しているが、1年弱滞在した者に期待される語学力を身につけたという自信がない。これはもちろん筆者の努力不足も原因だろうが、みっともなさを承知で、少し言い訳をしたい。レバノンは独立前はフランスの委任統治領だったので、フランスとの関係が深く、伝統的にフランス語話者が多いが、それに加えて、特にベイルートでは、とにかく英語を話せる人が多いのである。例えば、外国人も多く利用するようなお店は当然として、あまり外国人の利用がなさそうな下町の小さなお店でも、英語が話せる店員がいる可能性が高い。飲食店でも、メニューはアラビア語と英語の両言語が表記されている店が多いし、そもそも英語のみでアラビア語のメニューがないという店も存在する。英語が広く通じる原因は色々あるだろうが、レバノンの教育事情も関係している。レバノンにはアラビア語以外の(数学などの)授業を英語かフランス語で行う私立の学校が多い。また、レバノンの有力私立大学であるベイルート・アメリカン大学やレバノン・アメリカン大学では授業が基本的には英語で行われている。こうした学校の学生たちは普段から英語やフランス語とアラビア語を交ぜた話し方で会話している。英仏アラビア語すべて出来る筆者の知り合いに聞いてみると、頭の中で考える時も3言語を交ぜているのだそうだ。

こうした環境は言うまでもなく、語学力向上に向いていない。もちろん、英語が通じるという状況に甘えてしまうという筆者の問題もあるかもしれないが、筆者がアラビア語で話しかけても、相手が英語で返事をしてくるという困難もある。ただ、ベイルートを離れると状況は少し異なっていて、他の町ではベイルートほど英語は通じないようだ。レバノン北部の町トリポリの語学学校が、「ベイルートでアラビア語を学ぶつもり？」という挑発的なキャッチフレーズの広告をベイルート市内で出していた、という話も聞いたことが

ある。

語学学習に最適の環境ではないかもしれないが、筆者のベイルートでの留学生活の最大の目的は博士論文執筆のための研究調査である。そして、研究環境という意味では、ベイルートは優れている面が多い。筆者が所属する国立のレバノン大学のほか、私立のベイルート・アメリカン大学(AUB)、レバニーズ・アメリカン大学(LAU)、サン・ジョセフ大学など、アラブ圏の中でも有名な大学が集中している。また、フランスの研究機関であるInstitut français du Proche-Orient (Ifpo)、ドイツの研究機関であるOrient Institut Beirut (OIB)など外国の研究機関もある。そのおかげで、世界各国からの研究者・院生と交流するチャンスは多い。例えば、OIBでは、毎月1回、軽食をつまみながら研究者が交流するというイベントが行われている。また、これらの大学や研究機関にはもちろん充実した図書館もあり、筆者はAUBとIfpoのものを利用したことがあるが、外部の間でもとても利用しやすかった。この他、様々な研究会やシンポジウムなどがアラビア語に限らず英語やフランス語でも開かれている。レバノンは出版も盛んで、大手チェーンのAntoine書店にはいつも多数の新刊本が並んでいる。11月~12月にはアラブ国際ブックフェアが開催されるが、これは1日では廻りきれないほど規模が大きく充実している。筆者は行ったことがないが、フランス語書籍のブックフェアも開かれている。このように、ベイルートには研究者にとって恵まれた環境があると言うことができるだろう。

そして、仮に研究に疲れても、息抜きもできる。例えば、地中海沿いの遊歩道、コルニーシュでの散歩は悪くない。残念ながらレバノン沿岸は海洋汚染が深刻で、コルニーシュから真下の海を覗き込むとゴミがぶかぶか浮いているのだが、遠くの水平線を眺めればよい景色である。波の音はベイルートの喧騒にかき消されてしまうが、



地中海沿いのコルニーシュ

この活気を感じながら歩くのがペイルートの海沿い散歩の醍醐味だ。

このようにペイルートは研究環境が充実し、息抜きに地中海沿いを散歩できる。関心がある方は留学を検討されてみてはどうだろうか。

(2) ミュンヘン大学留学報告

大淵 久志

東京大学大学院人文社会系研究科
アジア文化研究専攻博士課程

東京大学との交換留学協定を利用して、昨年9月からミュンヘン大学 Ludwig-Maximilians-Universität München (LMU) で研究活動をおこなっている。レバノン留学の報告を同じく書いている早川君とは、駒場入学時の第二外国語のクラスから今にいたるまでの付き合いで、エジプトやヨルダンなどをともに訪れた仲である。こうして留学報告を並べて書くめぐり合わせをおもしろく感じつつ、わたしはミュンヘンでの生活にかんすることをここに報告する。なお2018年度4月からは、制度上は交換留学ではなく、ミュンヘン大学での研究指導委託として、JSPS 科研費 18J10539 によって研究活動の経費がまかなわれている。

一年間の留学先としてミュンヘン大学を選ぶのには苦労しなかった。わたしの

研究対象であるイスラム神学やアラビア哲学の専門家を擁する世界中の大学で、東京大学との協定関係にあるものはそれほど多くない。そして授業言語が英語で、なおかつわたしが有していたIELTSのスコアが条件よりうわまっていたのは、幸いにも、ミュンヘン大学のみだった。幅広い活動で知られるアダムソン Peter Adamson 教授に興味が以前からあったし、彼が専門的に扱う古典ギリシア哲学や初期アラビア哲学について集中的に学びたかった。またミュンヘンからはヨーロッパのみならず中東諸国へ資料調査に出かけやすいだろうと考えた。さらに、ドイツ語をこの機会に習得したいということ、おいしいビールを飲みたいという(かなり強い)動機で、必然的にこの大学に決まった。結果から言えば、これらすべての目的は十分に達成できたし、総合的によい留学だった。以下では、アダムソン教授のゼミなど大学の様子、ミュンヘン大学でのイスラム・中東研究の事情、ドイツ語の勉強、ミュンヘンの歴史や文化を紹介したい。

アダムソン教授は、わたしが出席したアラビア哲学のゼミのほかに、プラトン『ティマイオス』を読むゼミや哲学史の概論の講義を受け持っている。これらに加えて彼は *History of Philosophy without any gaps* (<https://historyofphilosophy.net/>) というポッドキャストのシリーズを持つ。そして指導学生がとても多い。わたしはまず彼のこうした仕事量に驚いた。

彼のゼミは、アラビア語の哲学書を講読していくというスタンダードな内容である。出席者は多いときで十数人もいて、ポスドクが半数、大学院生が半数といったところだった。2017年10月から翌年1月までの冬学期は、10世紀のタウヒーディーとミスカワイヒの間の書簡集 *al-Ḥawāmil wa-l-ṣawāmil* を、4月から7月までの夏学期は同じく10世紀のファーラービーの *al-Wāḥid wa-l-waḥda* を講読した。講読の進め方は両学期で異なった。前

者は、パーミンガム大学のヴァサル博士 Sofia Vasalou による英訳プロジェクトを前提として、その試訳を見ながら、章をとばしとばしに担当者を決めて、概要と翻訳を発表し、皆で議論をするというやり方であった。夏学期は伝統的な輪読スタイルで、順番にアラビア語を音読し、訳を言った。これを博論で扱う Hakan Genc 氏(失礼ながら彼の所属を記憶していない)が学期途中から参加した。以上のゼミ形式は日本とそう変わらないが、やはり議論の活発さとテンポが印象的であった。その前提として、教授とその他参加者とのフラットな関係性があるように思われる。ちなみに冬学期は教授の講義にも出席した。これの授業言語はドイツ語で、内容はアラビア哲学史の概論であった。大きい教室は若い学生よりも白髪のおじいさんとおばあさんで占められていた。教授は、毎回A4一枚の簡潔なレジュメとともに、たとえ話やジョークをまじえながら、テーマごと——たとえば「神」や「時間」——に巧みに講義をした。ミュンヘン大学では授業の終わりに机をコンコン叩いて拍手のようなことをする。これがこの大学だけなのかドイツの諸大学でおこなわれる習慣なのかはよくわからないが、わたしはおもしろがって盛んに叩いた。

さて、アダムソン教授の所属は哲学部であって、その派生組織のMUSA Φ (Munich School of Ancient Philosophy) を2010年の設立以来、牽引する一人である。つまりミュンヘン大学におけるアラビア哲学研究は、文化学部中近東科やその下部のアラブ学・イスラム学とは全く区別されている。MUSA Φ および哲学部には豊富な資金と人員があるようだが、中近東科はそうではない。その所蔵図書を見ても、中近東科にはかつてのセム学などの所蔵印が残る古い書籍がほとんどである。イスラム神学やアラビア哲学にかんして言えば、校訂刊本や研究書の所蔵はまったく不十分で、ましてや中東諸国で近年出版されたものなどはフォローできていない。かと

いて哲学部は欧米で出版された専門書は比較的よくそろえているが、アラビア語やペルシア語の書籍を所蔵することはない。バイエルン州立図書館にもわたしが目的とするような古い書籍がいくらか所蔵されているが、注文して5日ほどで手元にわたるシステムなので、やはり使い勝手はよくない。こういう理由で、わたしは何度か東京にいる後輩をこき使わなくてはならなかった。とはいえ、すばらしい点もいくつかあって、まず、ミュンヘン大学は無料で高性能のブックスキャナーをいくつも備えている。またわたしは哲学部にアヴィセンナの*The Canon of Medicine*の英訳五巻の購入希望をオンラインで提出したのだが、わずか一週間程度で購入の決定がなされ、次の週には納入されていた。日本の大学ではこのように物事は進まないだろう。

ゼミのほかに、わたしはこれまで敬遠していたトルコ語の語学授業をとった。ミュンヘン大学にはヨーロッパの一通りの言語はもちろん、各種言語の授業があって、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）にしたがってA1～C2までクラス分けがなさ

れている。ただしいわゆる「マイナー」な言語はA2かせいぜいB2までしか授業が用意されていない。トルコ語にいたっては、中近東科トルコ学のインテンシヴなクラスでなければ、A1.1とA1.2の2つしか習えない。教師の質もいまいちで、週一コマのみの授業であるし、なによりもわたしの不真面目さが原因で、それほどトルコ語を覚えられなかった。

しかしながらドイツ語にかんしてはふだんの生活で使う必要があるので、怠惰なわたしでも一年間でそれなりに習得することができた。9月、2月、3月の長期休暇は私営の語学学校のインテンシヴコースに通い、いくらか成長した。冬学期中は大学併設の語学学校に週二回通ったが、こちらはあまりためにならなかったように思われる。夏学期も語学学校に通いたかったのだが、経済的・時間的に叶わなかった。ドイツ語学習においてわたしが恵まれていたのは、英語よりもドイツ語に長けている東欧の留学生たちと仲良くなったことであった。そうした留学生たちの共通語はドイツ語であるが、ネイティブのものほど難しくはなく、完全に初歩からはじめたわたしはそれでも最初はなにもわからなかったが、ちょうどよい練習になった。そしてミュンヘン大学で日本学を専攻する学生たちとのつきあひも勉強になったし、なによりもすばらしい友人たちを得ることができた。また他の日本人留学生からも多くを学んだ。とくに京都大学でフランクフルト学派の研究で博士課程をなさっている橋本紘樹さんからは、いろいろと教えていただき、夏学期にはカントの*Prolegomena*の講読をした。これは相当な勉強になった。

最後にミュンヘンの紹介に移りたい。バイエルン州都ミュンヘンはドイツのほぼ南東端に位置し、首都ベルリンなどよりもウィーンのほうが近い。言語についてもオーストリアと同じように、標準的なドイツ語とは相当の隔たりのあるバイエルン方言あるいはバイエルン語の地域であ

る。ただしドイツ有数の大都市ミュンヘンにはいまでもこそ正則的なドイツ語を話す人々が多い。他地域出身のドイツ人は小馬鹿にしているふうに見受けられたが、わたしはバイエルン語もしくはドイツ語バイエルン方言の響きが気に入った。

ミュンヘンという名は、英語でいうとmonk、つまり僧侶から由来するそうだ。市章も僧侶（こども）の図をあしらっている。そこから見てとれるように、カトリックが伝統的には強く、政治については保守的だとも言われる。12世紀からヴィッテルスバッハ家のバイエルン公、そしてバイエルン王が治めてきた。この王国の国旗の白と青空色は、現在もバイエルン州のシンボルカラーである（例えば地下鉄やトラムも青と白を基調としている）。第一次大戦後のドイツ革命でバイエルン王が廃位されると、やがてミュンヘンはナチスの本拠地となった。ミュンヘン大学の学生団体「白いバラ」は反ナチ抵抗運動を進めたが、逮捕・処刑されてしまう。ミュンヘン大学のメインビルが置かれる広場は、中心メンバーのショル兄妹の名がつけられ、彼らが撒いたピラを模した石板が地面に埋め込まれている。そこにはときおり白バラが供えられている。

連合軍による幾度の空襲でミュンヘンは破壊されたが、現在は経済的にかなり豊かで、わたしと思うには、そのおかげで治安がかなり良く、住みやすい。しかし反面、住居不足が深刻で、家賃が高騰しているところか、そもそも住む家がないという事態がよく生じている。これは学生も例外ではなく、ヨーロッパからの交換留学生たちでさえ学生寮が割り当てられない事例を多く見かけた。

このミュンヘンにはベルリンやウィーンほどのわかりやすい観光名所はないのだが、旧市街の街並みや市庁舎、諸教会、王宮、美術館・博物館などは一見に値する。またブンデスリーガ最強のFCバイエルンのスタジアムやショップ、BMWの本社博物館なども興味深いだろう。さらに、日本



ミュンヘン大学図書館で用いられる席確保のためのカード。休憩時間を示すことができ、バイエルン語で "(ich) komme gleich zurück" (すぐ戻ります) と書かれている。

人に人気のノイシュバンシュタイン城もミュンヘンから電車とバスで二時間ほどの山中にある。なによりも雄大なアルプスと村々が美しい。

しかしながらミュンヘン名物といえばビールと食である。日本人が持つステレオタイプのドイツはむしろこうしたバイエルンの姿であるかもしれない。日本でも近年各地で催されているオクトーバーフェストはミュンヘンが本場である。9月下旬から10月上旬にかけて毎年開催されるこの祭りの規模と盛り上がりは驚異的で、「テント」と称される巨大な体育館のような建造物が、各ビールブランドごとに十数棟並び、それらが日中からすべて満員になる。ステージでは民族衣装をまとったバンドが英語やドイツ語の懐メロを爆音で演奏している。客も巨大な1リットルのビールジョッキを片手に大合唱するので、テント内では会話などままたまらない。あまり綺麗なものではないが、年に一度ならおもしろい。もちろん伝統的なレストランでは、比較的静かな環境で、おいしいビールと肉料理がいつでも楽しめる。朝でさえ白ソーセージと白ビールの伝統的食事をとるこ



ミュンヘンのViktualienmarktに建つMaibaum (Maypole)。在りし日のミュンヘンの姿や7大ビールブランドのマークなどが描かれている。バイエルンの各所のMaibaumはこの青白のカラーである。



ミュンヘン市内のAugstiner-Bräuの工場前にて。

とができる。夜も肉とジャガイモの料理を楽しめる。とくにハクセと呼ばれる豚のすね肉の丸焼きは、つけあわせのジャガイモ団子とともに、胃袋を満たしてくれる。

観光客にはホフプロイハウスブランドの歴史あるビヤホールが有名だが、わたしはアウグスティナーの店をおすすめしたい。アウグスティナーは、社の方針なのか、ミュンヘン外へほとんど輸出をしていないし、まして日本ではまずお目にかかれないだろう。なによりもミュンヘンでもっとも飲まれているビールはこのアウグスティナーなのである。いたるところで半リットル1ユーロで大量に売られている。街中には割れたアウグスティナーの黒い瓶がよく散乱している。わたしはこの「割れたアウグスティナー」がミュンヘンのひとつの観光名物なのではないかと思っている。「人口150万の村」とも呼ばれる平和なミュンヘンをわたしは愛してやまない。

(3) イスラエルの性的少数者事情～留学生活をもとに～

保井 啓志

東京大学大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻博士課程

いつもは静かなヘブライ大学の構内を、音楽が鳴り響く。ゲイ・アイコンとしても有名なレディー・ガガの『Born This Way』だ。音楽の鳴る方へ向かってみる

と、6月のプライド月間（プライドはセクシュアリティに対する誇りの意味を表す）に合わせて、性的少数者に関する学生団体が、性的少数者の権利の向上を目的としたイベントを行っていた。日本では今年7月、お茶の水女子大学がトランスジェンダー学生の受け入れを表明したことが記憶に新しいが、2015年のLGBTという言葉の急速な普及と共に、大学においてもSOGI（性的指向及び性自認の意味）に関する様々な取り組みが目目されるようになってきた。筆者が昨年2017年の7月から留学しているイスラエル／パレスチナにおいても、性的少数者や性の多様性といったテーマは社会的な関心を寄せるもののうちのひとつである。最近では今年7月に代理母出産に関する法案から同性愛者が排除されたことがテル・アヴィヴでの大規模なデモに発展し、大きな反響を呼んだばかりである。

ここで、現在に至る歴史的歩みを簡単に見てゆきたい。イスラエル／パレスチナのSOGIをめぐる動きは1990年代前後に大きな変化が見られた。イスラエルには、英国委任統治下にあったという歴史的経緯から、非規範的な性行為を禁止した所謂ソドミー法が存在していたが、1988年に同法案が正式に撤廃された。これらの法律が廃止されると、1990年代、主に労働党政権下で比較的短期間のうちに法律面での変化が起こった。1992年に、職場における性的少数者に対する差別を禁止す



プライド月間に合わせたヘブライ大学のイベントの様子：撮影者筆者

る法律が可決され、それを受け、イスラエル国防軍における性的少数者の差別禁止の方針が明確化された。翌年1994年には、高裁が同性のカップルを配偶者と認める見解を出した。これにより婚姻に準ずる非登録居住制度に同性カップルが認可されたことになり、事実婚の次元での同性カップルの権利の保障が充実した。なお、イスラエルでは、それぞれの宗教の執り行う挙式を挙げるのが法律婚の条件となっており、婚姻に大きな影響を与えるユダヤ教超正統派の同性愛に対する根強い忌避観及び反対もあるため、同性婚は現在まで認められていない。

立法及び行政面でのこれらの動きと並行する形で、当事者団体や非営利団体をはじめとした性的少数者の人権活動団体が組織されるようになった。イスラエルで最も古い性的少数者らによる当事者団体は、1975年に設立された「イスラエル・ゲイ・レスビアン・バイセクシュアル・トランスジェンダー協会」(通称ハ・アグダ)であり、1998年にイスラエルで初となるテル・アヴィヴ・プライドが、ハ・アグダによって行われた。その後、2001年にはエイラトで、翌年の2002年には、イエエルサレムで、2007年からはハイファで、2016年からはベエル・シェヴァでそれぞれプライドが行われ、現在も継続されている。2000年代に入ると性的少数者の若者支援を行う団体やユダヤ教内における性的少数者の権利向上を目的とした団体などが次々と立ち上がり、領域横断的に性的少数者に対する社会の受容に向けた取り組みが行われるようになった。2000年代に入ると、パレスチナ系の団体も活動を始めた。2001年にはパレスチナコミュニティ及びパレスチナ社会における当事者支援を行うアル・カウズという団体が設立されている。また、翌年の2002年には、パレスチナ社会での女性の性的少数者の地位の向上を目的とした団体アスワトが設立された。

筆者が通うヘブライ大学でもまた、

SOGIに基づく差別を是正するための取り組みが幾らか行われていることが、留学生活を通じて確認できた。大学のオリエンテーションではLGBTQ等に該当する学生に対する支援先、問い合わせ先の紹介があるほか、ヘブライ大学の構内には、多くはないがAll Genderと書かれたお手洗いが設置され、性的少数者向けのイベントの告知メールなどがしばしば学生の元に届く。日本では未だにしばしば聞く、教員からの性的少数者に対する差別的な発言やからかいも、こちらに来てから一度も聞いた経験がなく、教員はSOGIに関し差別的な発言を行わないよう少なくとも最低限の訓練がされていると感じる。一般的に、性的少数者は異性愛あるいはシスジェンダーが社会的に前提とされているが故に大学生活を過ごす上で困難を抱え、学習機会を奪われやすい。そのことを考慮すれば、これらの配慮からは、少なくとも多様な性の学生を受け入れ、学習機会を提供しようというヘブライ大学の意志が伝わってくる。

イエエルサレム、テル・アヴィヴの両都市のプライドに参加して

筆者は昨年7月からイスラエル/パレスチナに留学に来ているが、昨年8月、それから今年6月に、それぞれイエエルサレム・プライド、テル・アヴィヴ・プライドに参加した。イエエルサレム・プライドはこれまで一度参加した経験があったものの、テル・アヴィヴ・プライドに参加するのは今年が初めてであった。筆者が実際に参加してみたところ、イスラエルで第一、第二の規模を誇る両都市で行われた二つのプライドは、対照的な特徴を持っていると肌で感じた。ここでは簡単にその経験を記しておきたい。

最も大きな両者の違いは、政治色の濃淡である。イエエルサレム・プライドでは過去にユダヤ教超正統派の男が押し入る刺殺事件が起きている。そのことから、イベントに対する警備は非常に厳重であった。

イエエルサレム・プライドの入り口には、同性愛に反対するユダヤ教超正統派の数人が反対デモを行い、「イエエルサレムはソドムではない」のプラカードを掲げるなど、イエエルサレム・プライドには緊張感が張り詰めている。筆者が参加した際には不審物騒ぎまで発生したほどである。行進を行った際には、宗教的なユダヤ人と思われる住民から親指を下に向けたサインが参加者に向けられ、それに対し参加者が中指を立てて対抗している姿も見られた。その一方、テル・アヴィヴ・プライドは、エルサレム・プライドと同様に、行進の道りでは車道が完全封鎖されバリケードが敷かれるなど、厳重な警備ではあるものの、ひとたび中に入れば参加者の雰囲気はさながら「お祭り」である。中ではクラブ・ミュージックなどが流れ、行進の後にはビーチで踊るための場所が広く確保されているほどである。今年はユーロ・ヴィジョンで優勝したイスラエル人の歌手も登場するなど、テル・アヴィヴ・プライドはデモ行進というよりは、さながら街を挙げての「お祭り」である。観光客と見られる人々が多数参加しているが見受けられるのもその「お祭り」のような雰囲気に拍車をかけている。このように、イエエルサレムは性的少数者の権利に対する政治的闘争の色合いが濃いが、対照的に、テル・アヴィヴ・プライドでは脱政治化と商業化がその大きな特徴と言える。

プライドに対するそれぞれの行政の対



テル・アヴィヴのビーチにて。テル・アヴィヴ・プライドのイベントのフロートと多くの参加者で盛況している。：撮影者筆者

応も異なる。テル・アヴィヴ市は市を挙げて性的少数者の権利の擁護の姿勢を積極的に打ち出しており、テル・アヴィヴ・プライド当日になるとテル・アヴィヴ市庁舎は虹色に明かりが点灯され、その姿勢を積極的に打ち出している他、テル・アヴィヴ・プライドと協働し海外からの観光客誘致に観光資源として利用している。テル・アヴィヴ市は他にも性的少数者権利擁護の姿勢を明確にしている。2008年にThe Gay Centerと呼ばれる施設がテル・アヴィヴ市の資金提供によって設立され、多くの団体がこの施設を利用している。一方、エルサレム市は、エルサレム・プライドに対し、警察による警備は行うものの、テル・アヴィヴほどは積極的な支援をしてこなかった。2016年、エルサレム市長のニル・バルカットはエルサレム・プライドに参加しないことを公式表明し、「行進するのは彼らの権利だ。エルサレム市、私自身そして警察はその権利を享受できるよう全てのことをする。しかし彼らはそれらが他者を傷つけることを理解せねばならない。寛容性は人々が行進するのを許可することだけでなく、他者の感受性や感情を攻撃することなく行進するやり方を発見することも意味するのだ」と、慎重なコメントを残している。プライド参加者の数も大きく異なる。2018年に行われたテル・アヴィヴ・プライドには25万人近い参加者があったとされ、これはアジア大陸で行われたLGBTプライドの中では最大の動員数を誇る。一方、エルサレム・プライドは2万人ほどの参加者であると言われている。エルサレム市は総人口でテル・アヴィヴ市のおよそ二倍の80万人であることを考えると、圧倒的に規模が異なることがわかる。

これらの違いには、やはりイスラエル国内における聖俗の対立が大きく影響している。エルサレムには、最も保守的なユダヤ教超正統派の人々がおよそ人口の20%ほど住んでいるが、他にも、エルサレムは多くの宗教的なユダヤ人口を多

く抱えている。その為、性の解放運動や性的少数者、とりわけ同性愛者の権利向上に対する忌避観が強い。さらにエルサレムは聖地を抱え、宗教的に重要な土地と考えられているため、大都市にもかかわらず非常に宗教的な価値観を色濃く反映した街と言える。一方、テル・アヴィヴには多くの世俗派のユダヤ人が多く住んでおり、宗教的な忌避観が比較的弱い。

今や、性的少数者の人権という問題群は、「イスラエルの21世紀の世俗主義を特徴づけるものとなった」と評されるほど、目まぐるしい変化を遂げている領域の一つである。そのような流れの中で、実際にエルサレムに留学し、またプライドに参加してみると、イスラエル/パレスチナという非常に小さな地域にもかかわらず、その中でも一枚岩とは決して言えない国内外の分断や、聖俗の対立が存在していることが実感できた。以前本ニュースレターに寄稿した筆者の関心の寄せるセクシュアリティとパレスチナ問題の交差の問題もまた、その複雑さの中でどのようにお互いに作用し、展開しているのか、引き続き注目してゆきたい。

(付記) 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費29・7426)の助成を受けたものである。

(4) エジプトにおける政治の現状—現地での経験から学ぶこと

上野 祥

東京大学大学院総合文化研究科
国際社会科学専攻博士課程

「僕はエジプト政治について研究しています。」筆者がそう言うと、エジプト人は皆困惑した表情を浮かべる。そのあとはそのまま深く触れずに別の話題に移っていく人もいれば、「大変ですね」と同情的な表情を浮かべる人もいるし、どんと答

えるのが難しい問い(例えば「どうすればエジプトは日本のように発展することができるのか」というようなもの)を投げかけてくる人もいる。けれども、「政治」という言葉に対してエジプト人たちが皆最初に見せる同じような反応は、現在のエジプトの政治状況を表しているように感じられた。

筆者は現在、松下幸之助記念財団より奨学金をいただいて、2017年7月から2年間の予定でエジプトに長期留学中である。研究テーマは「ムバーラク政権期以降のエジプトにおける政治的抑圧と抗議運動」。エジプトにおいて長年行われてきた政治的抑圧が、2000年代以降活発化していく抗議活動を、ひいては2011年の1月25日革命の発生を防ぐことができなかったのは何故なのか。逆に革命後抗議活動が活発化した期間を経て、近年では政治的抑圧が抗議活動を抑え込むことができている(少なくともそのように見える)のはなぜか。こうした疑問に対して抗議活動の側からではなく政権による政治的抑圧という観点から答えることはできないか、というのが筆者の関心である。「政治」というワードだけでも一般の人々に怪訝な顔をされるエジプトにおいて、筆者の研究テーマは危険な場所をストレートに狙うようなものだった。幸いにも今のところ身の危険を感じるような事態には遭遇していないものの、現地でこのテーマの研究を行うことがなかなか難しいと感じさせるような事態には何度か遭遇した。

学問の自由の制約

とりわけ大変だったのは、大学への所属をめぐるトラブルだ。現在筆者はカイロ・アメリカン大学に所属しているのだが、大学に提出した研究計画書の内容が「センシティブである」という理由で一度所属を拒否されてしまったのだ。カイロ・アメリカン大学には筆者と似たような問題関心を持つ研究者も何人か所属しており、また受入教官からも「君の研究テーマは過去のこ

とが中心だから大丈夫だろう」と言われていただけに、筆者は驚きを隠せなかった。それとともに、外国資本で授業もすべて英語で行われ歴史も長いカイロ・アメリカン大学でさえも、難しい立場に置かれていることを実感した一幕であった。結局筆者はそれまでとはほとんど関係のない研究テーマに差し替えて再提出することで、ようやく所属を得ることができた。

とはいえ、この件に関しては2016年1月に発生したイタリア人留学生殺人事件のことを考えると致し方がないともいえる。イタリア人でケンブリッジ大学の博士課程に所属していたジュリオ・レジーニ氏が、エジプトでの現地調査中に失踪し、翌月に遺体で発見されるという事件が発生した。彼は独立系の労働組合を研究テーマとしており、死体には拷問の跡が残っていたということで、エジプト政府の関与が強く疑われている（エジプト政府はもちろん否定しているが）。実はレジーニ氏はエジプトでの現地調査中に筆者と同じようにカイロ・アメリカン大学に所属しており、その結果彼の受入教官も何らかの関与を疑われるなど、この事件は大学にとっても色々と大きな影響を与えていた。この背景を踏まえると、大学側が筆者の研究テーマに対して難色を示したのも理解できる。

政府への批判の制約

もう一点、現地で調査することの難しさを実感した事例を紹介したい。問題関心の都合上エジプトで活動するローカルな人権団体の報告書を利用する必要があると考えた筆者は、過去に出版された報告書を入手するために人権団体の事務所を訪問しようと、ある知り合いのエジプト人に同行を依頼した。というのも、訪問する先に英語が堪能なスタッフがいるとは限らず、その場合には自力で交渉するよりも知り合いのエジプト人に仲介してもらおう方がスムーズにいくだろうと考えたからである。また、依頼したエジプト人は1月25

日革命後の一時期政治活動に携わっていた経験もあるということで、他のエジプト人と比べて依頼を受けてもらいやすいと思われた。しかし、そんな人でも「人権団体に行くのは怖い。万が一政府に目を付けられることがあれば、二度とエジプトに戻って来なくなるかもしれない」と恐怖心を露わにして、申し訳なさそうに筆者の依頼を断ったのだった。エジプトにおける政治状況の厳しさを、改めて思い知らされる一幕であった。

実際、このような恐怖心は決して大げさなものではない。筆者がこのエジプト人の知り合いに依頼したのは2018年5月中旬、ラマダーンに入る直前の時期のことであったが、この時期には現政権に批判的なジャーナリストやブロガー、弁護士などが相次いで逮捕されている（そしてその多くは2カ月以上経った7月現在も拘留が続いている）。また、直前には運輸省が突然カイロ市内を走る地下鉄の運賃の値上げを発表し、一部の駅で小規模ながら抗議活動が発生して活動家が逮捕されるという事件も発生している。さらに、人権団体はローカルなものにせよ国際的なものにせよしばしば現政権の活動に対して批判的な声明や報告書を発表し、政権側がそれに反発・非難して一部団体のwebサイトをブロックするなど、しばしば緊張関係にある。近年だと2017年9月に国際的な人権団体ヒューマン・ライツ・ウォッチがエジプトにおける政治的抑圧を非難する報告書を発行し、政権側が猛反発した事件が記憶に新しい。なおヒューマン・ライツ・ウォッチのWebサイトは執筆時現在（2018年7月末）に至るまでエジプトでは閲覧することができない。またカイロ人権研究所（CIHRS）のように、国内での活動に限界を感じ拠点を国外に移す人権団体も現れている。こうした状況の中で、たとえただ訪問するだけであっても人権団体と関係を持つことが危険だと感じて仕方がないと言えるだろう。

なお、およそ2か月後の2018年7月中

旬に筆者が結局一人である人権団体を訪ねた際には、特に周りに警官が配備されているというわけでもなく、身の危険を感じることもなかった。また、その後少し時間はかかったものの、必要としていた資料もひとまず入手することができた。恐怖はひとまず杞憂に終わったわけだが、今後の政治状況の変化次第ではどうなるか分からないため、慎重に動く必要性を感じている。

なぜ抑圧するのか？

先ほどの話から少し時をさかのぼり、2018年1月25日。1月25日革命の発生からちょうど7年が経ったこの日、街の様子がどのようなものかを覗きに筆者はタハリール広場を訪れた。もしかしたら抗議集会か、あるいは何か特別な現象を見ることができるとも期待したが、眼前に広がっていたのは、祝日らしくいつもよりも人通りも車通りも少ない、ひっそりとした光景だった。ただいつもと違っていたのは、あちこちに多数の警官が配備されていたことだ。物々しい雰囲気でも周囲をにらみつける警官たちの様子は、現政権が「1月25日革命の再来」を警戒していることを物語っているように見えた。

実際、現政権が民衆の抗議活動を警戒していることは間違いない。2013年7月のクーデター以降、デモ規制法（2013年法律第107号）による抗議活動弾圧の合法化を初めとして、上述したような自分たちに批判的なジャーナリストや政治活動



2018年1月25日のカイロ・タハリール広場の様子。写真には写らなかったが、周囲のあちこちに暴動鎮圧担当の警察官が配備されていた。

家などを逮捕するという物理的な弾圧から、NGOやメディアなどの活動に対する法律を通じた統制の強化まで、現政権は硬軟織り交ぜた対応によって自分たちの政策に対する反発を抑え込んでいる。とりわけ2013年7月のクーデターで追放された政権の支持基盤であったムスリム同胞団関係者への弾圧は激しく、国内に残る同胞団関係者はテロリストの名簿に指名されて出国禁止処分や財産の没収などの処分を受け、クーデター直後に軍や治安機関と衝突した事件に関連して逮捕された人々には、幹部を中心に死刑や長期刑などの厳しい判決が下されている。

現政権が抗議活動を警戒する背景には、人々の生活状況が徐々に厳しさを増しつつあることが挙げられる。元々エジプトでは1月25日革命以前より特に若年層の間における高い失業率など人々の間で経済的な不満が存在することが指摘されていたが、この問題は革命から7年が経過した今日に至るまで解消できているとはとても言い難い。それどころか、近年現政権は国際通貨基金（IMF）との協定に基づいて補助金の支出削減を進めており、2018年6月には水道、電気、ガソリンなどの燃料補助金の削減が相次いで発表され、7月にもガスに対する補助金の削減も発表された。これにより、元々2016年11月にエジプトが変動相場制へと移行して大幅なエジプト・ポンド安が生じたことによるインフレで苦しんでいた人々の生活はさらに打撃を受けることになった。経済的不満を主な要因とする抗議活動が直近ではヨルダンやイランで生じていることを踏まえると、エジプトでも似たような事件が

生じても不思議ではなく、その意味では現政権の警戒は正しいと言えるだろう。

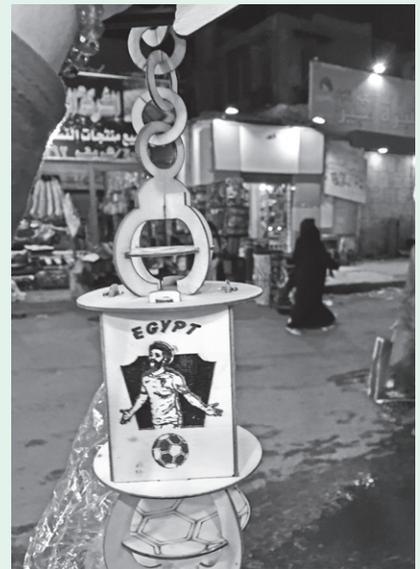
もっとも、仮にエジプトで今経済的不満を背景とする抗議活動が生じたとしても、それが直ちに現政権の安定性にヒビを入れることはないだろうと考えられる。2013年7月のクーデター以前に最大の勢力を誇っていたムスリム同胞団は厳しい弾圧により国内での活動基盤を失い、他の勢力も軒並み現政権に追従する姿勢をとっている。無論現政権に批判的な勢力も存在するものの、その勢力は小さくとも現政権に対抗できる状態ではない。予期せぬ形で「2度目の1月25日革命」へとつながってしまう可能性もゼロとは言えないが、2000年代とは異なり抗議活動が

停滞している現状では、その見込みはかなり薄いだろう。したがって今後も現政権はしばらくの間安定的に同様の政策方針を継続していくことが予想される。

筆者の研究関心との兼ね合いから物騒な内容を記してしまったが、実際には非常に穏やかに留学生活を送ることができている。とはいえその背景には筆者の研究進捗が芳しくなく、また筆者のアラビア語の語学能力が低すぎるため、現政権に脅威として認定されず皮肉にも安全が確保できている、ということがあり、あまり喜んでもいられない。この1年で得られたことを糧としつつ、悔いが残らないよう（しかし自分や周囲の人々の安全を第一に）残りの1年も駆け抜けていきたい。



2018年3月に実施された大統領選挙の際に掲示された、選挙ポスター（写真は当選したアブドゥルフアターフ・アッ=スィ=スィ=スィ=大統領のもの）



ラマダーンに際して販売されていた、エジプト出身のサッカー選手ムハンマド・サラーフ（モハメド・サラ）のファーンヌス（灯籠）

5. センターの活動から

中東地域研究センター付属図書室 パフワーン文庫開室状況報告

倉澤 理

オマーンの実業家ムハンマド・サウード・パフワーン氏の寄附により開室準備が進められていた本センター付属図書室「パフワーン文庫」が、今年2月13日に仮開室を、そして5月7日より貸出業務を伴った本開室をするに至りました。

昨年より、各方面からのご協力により、寄贈されたものも含め、およそ1000冊の資料を取り揃え、満を持して開室することができました。

仮開室以降、教職員、学生、本学関係者問わず、様々な利用者の方が来室しております。

昨年度は辞書類をはじめ、「図書室」には必須とされる書籍を蒐集することに比重を置きましたが、今年度は、様々なスタンスで中東研究に従事している駒場キャンパスの学生のニーズに応えるべく、特殊文字資料（アラビア語などの中東諸言語の書籍）、非特殊文字資料（和文・欧米言語の書籍）の枠にとらわれず、本を蒐集していく予定です。

「中東研究」の名を冠した図書室である以上、アラビア語で書かれた基本的な文献の蒐集は本文庫の重要な責務ですが、学部生が多い本キャンパスの事情を鑑み、アラビア語を習得する上で必要な教材や、アラビア語教育に関する資料なども取り揃える方針です。

寄附者のパフワーン氏の意向を汲み、本

文庫は「開かれた図書室」として、様々な方に利用していただける、充実した空間の構築を目指しております。

本学関係者を問わず、住所確認のできる身分証をご提示いただければ、利用証の発行とともに、本文庫の利用が可能となります。

お1人5冊、1か月間の貸出となっております。

是非とも本文庫に足をお運びください。お待ちしております。

*パフワーン文庫の場所・開室日・時間：

東京大学駒場キャンパス9号館3階307室

祝日を除く月曜・水曜・金曜日の

12:00～17:00

(当日返却の一時持ち出しの受付は16:30まで)

●UTCMESスタッフ紹介（平成30年9月30日現在）

〈スタッフ〉

高橋 英海（センター長、兼務教授）

森元 誠二（客員教授）

近藤 洋平（特任助教）

倉澤 理（パフワーン文庫・特任研究員）

長澤 榮治（副センター長、兼務教授）

杉田 英明（兼務教授）

瀬口 美加（事務補佐員）

〈UTCMES運営委員〉

高橋 英海（委員長、大学院総合文化研究科教授）

長澤 榮治（東洋文化研究所教授）

西崎 文子（総合文化研究科教授・グローバル地域研究機構長）

黛 秋津（総合文化研究科准教授）

杉田 英明（総合文化研究科教授）

月脚 達彦（総合文化研究科教授・副研究科長）

真船 文隆（総合文化研究科教授）

菊地 達也（人文社会系研究科准教授）

〈スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座運営委員〉

高橋 英海（委員長）

月脚 達彦

西崎 文子

真船 文隆

黛 秋津

杉田 英明

●発行者情報 UTCMESニューズレター VOL.13 平成30年9月30日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター（スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座）

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 TEL：03-5465-7724 FAX：03-5454-6441

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/>

印刷：JTB印刷株式会社

〒140-0004 東京都品川区南品川5-2-10 TEL：03-5715-0912 FAX：03-5715-0909